

SESSION 2014

**AGRÉGATION
CONCOURS EXTERNE**

**Section : LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES
LANGUE ET CULTURE JAPONAISES**

VERSION SUIVIE D'UN COMMENTAIRE GRAMMATICAL

Durée : 6 heures

Documents autorisés : Dictionnaire Kôji-en, Iwanami, 1983, et rééditions; Dictionnaire Taishûkan Kango shinjiten, Taishûkan, 2001, et rééditions.

L'usage de tout ouvrage de référence, de tout autre dictionnaire et de tout matériel électronique (y compris la calculatrice) est rigoureusement interdit.

Dans le cas où un(e) candidat(e) repère ce qui lui semble être une erreur d'énoncé, il (elle) le signale très lisiblement sur sa copie, propose la correction et poursuit l'épreuve en conséquence.

De même, si cela vous conduit à formuler une ou plusieurs hypothèses, il vous est demandé de la (ou les) mentionner explicitement.

NB : La copie que vous rendrez ne devra, conformément au principe d'anonymat, comporter aucun signe distinctif, tel que nom, signature, origine, etc. Si le travail qui vous est demandé comporte notamment la rédaction d'un projet ou d'une note, vous devrez impérativement vous abstenir de signer ou de l'identifier.

Tournez la page S.V.P.

1) Traduire en français le texte ci-après (extrait de 平野啓一郎『私とは何か — 「個人」から「分人」へ』2012年).

2) Faire l'analyse logique, sous la forme d'un schéma détaillé en français, des deux phrases suivantes :

「分人は、相手との反復的なコミュニケーションを通じて、自分の中に形成されてゆく、パターンとして的人格である。必ずしも直接会う人だけでなく、ネットでのみ交流する人も含まれるし、小説や音楽といった芸術、自然の風景など、人間以外の対象や環境も分人化を促す要因となり得る。」

日本語の「個人」とは、英語の individual^{インディバイジュアル}の翻訳で、一般に広まったのは明治になってからである。しばらくは「一個人」と訳されていた。

individual は、in + dividual という構成で、divide (分ける) という動詞に由来する dividual に、否定の接頭辞 in がついた単語である。individual の語源は、直訳するなら「不可分」、つまり、「(もうこれ以上) 分けられない」という意味であり、それが今日の「個人」という意味になるのは、ようやく近代に入ってからのことだった。

日本人は、この概念を西洋から輸入したわけだが、「個人」という日本語からは、「分けられない」という原義を感じ取りにくい。そんなふうに考えてみたことがなかったという人が大半だろう。しかし、私たち「個人」の抱える様々な問題は、実は、この見えなくなっている語源にこそ隠されている。

個人は、分けられない。これは、人間の身体を考えてみるならば、当たり前の話だ。一人の人間の体は、殺してバラバラにしない限り、分けることができない。そのたった一つの体——実体として存在している個人に、「森林太郎」だとか、「川端康成」といった名前がそれぞれついている。

では、私たちの人格はどうだろうか？ 体と同じように、分けることができない、唯一のものなのだろうか？ 当然じゃないか！と、これまでは考えられてきた。私は私、あなたはあなただ。体と同じように、その境界ははつきりしていて、色々なことを感じたり、考えたりしている自分は一つだ、と。

しかし、本当にそうだろうか？ それは、私たちの実感と合致しているだろうか？ 頭をまっさらにして、人間関係を観察していると、どうもそうじゃないんじゃないかという

疑念が湧いてくる。

たとえば、会社で仕事をしているときと、家族と一緒にいるとき、私たちは同じ自分だろうか？ あるいは、高校時代の友人と久しぶりに飲みに行ったり、恋人と二人きりでイチャついたりしているとき、私たちの口調や表情、態度は、随分と違っているのではないか。

それはそうだ。人間には、色々な顔があるのだから。そう言われるかもしれない。

このことと、人格はただ一つ、という考え方とは、矛盾しているだろうか？ 恐らく多くの人は、矛盾しないと答えるだろう。人間は確かに、場の空気を読んで、表面的には色々な「仮面」をかぶり、「キャラ」を演じ、「ペルソナ」を使い分けている。けれども、その核となる「本当の自分」、つまり自我は一つだ。そこにこそ、一人の人間の本質があり、主体性があり、価値がある。……

こうした人間観は、非常に強固なものである。私たちは、ウラ・オモテがある人間を嫌うし、本音と建前を使い分けるのを日本人の悪習だと考える。八方美人というのは軽薄な人間の代表で、何よりも、「ありのままの自分」でいることこそが理想とされている。

どこに行っても誰と会ってもオレはオレ、ワタシはワタシ。それこそが、誠実な人間の生き方だ。——しかし、もう一度、実感と照らし合わせてほしい。そんなことは、果たして可能なのだろうか？ こちらはそれでいいかもしれない。しかし、相手をさせられる方は、たまったものではない。面倒臭いヤツと、辟易^{せきえき}されるのがオチだ。

人間には、一人一人、多様な個性がある。にも拘らず、相手がどんな人であろうと受け容れられる人格というのは、どういうものだろうか？ 聖人君子のような理想的な人格なのか、それとも、どんな消費者にもマツチする大量生産品のように、没个性的で、当たり障りのない人格なのか？ どちらでもなく、「オレはオレで通ってる」という人がいれば、周りが非常に寛大で、忍耐強く彼を受け容れているだけなのではないだろうか？

私はだから、人間は結局、他人の顔色を窺いながら、「本当の自分」と「表面的な自分」とを使い分けて生きていくしかない、と言いたいのではない。他者と共に生きるということとは、無理強いされた「ニセモノの自分」を生きる、ということではない。それはあまりに寂しい考え方だ。

すべての間違いの元は、唯一無二の「本当の自分」という神話である。

そこで、こう考えてみよう。たった一つの「本当の自分」など存在しない。裏返して言うならば、対人関係ごとに見せる複数の顔が、すべて「本当の自分」である。

「個人 (individual)」という言葉の語源は、「分けられない」という意味だと冒頭で書いた。本書では、以上のような問題を考えるために、「分人 (divided)」という新しい単位を導入する。否定の接頭辞 *dis* を取ってしまい、人間を「分けられる」存在と見なすのである。

分人とは、対人関係ごとの様々な自分のことである。恋人との分人、両親との分人、職場での分人、趣味の仲間との分人、……それらは、必ずしも同じではない。

分人は、相手との反復的なコミュニケーションを通じて、自分の中に形成されてゆく、パターンとしての人格である。必ずしも直接会う人だけでなく、ネットでのみ交流する人も含まれるし、小説や音楽といった芸術、自然の風景など、人間以外の対象や環境も分人化を促す要因となり得る。

一人の人間は、複数の分人のネットワークであり、そこには「本当の自分」という中心はない。

個人を整数の1とするなら、分人は、分数だとひとまずはイメージしてもらいたい。

私という人間は、対人関係ごとのいくつかの分人によって構成されている。そして、その人らしさ (個性) というものは、その複数の分人の構成比率によって決定される。

分人の構成比率が変われば、当然、個性も変わる。個性とは、決して唯一不変のものではない。そして、他者の存在なしには、決して生じないものである。